

ホスピス・シェーランド

お話：マリアナ看護部長
報告者：八切 静江・吉田信子

★リゾートホテルのようなホスピス

周辺は田園に囲まれた郊外の住宅地の中に、私たちが訪れたホスピスは、美しい外観で溶け込んでいました。迎えてくださったのは看護部長のマリアナです。まずは館内を見学。正面のピアノのある音楽室では理学療法士の指導で軽い運動をします。「亡くなった方の家族の会」も定期的におこなわれています。

居室はどのお部屋にもバルコニーがあり、デンマークの美しい地平線の風景が見渡せました。リゾートホテルのようになってしまうのは不謹慎ではありますが、訪れたメンバーは最高のロケーションに感嘆の声をあげました。

居室にはベッドとテーブルが備え付けられていますが、他にもリクライニングチェアやソファベッドなどもあり、自分の家具も持ち込めるそうです。また、ペットの犬や猫もOKです。ベッドのままテラスに出ることも可能で、テラスでは入居者と子どもたち家族がバーベキューを楽しむ姿も見られるとのことでした。

廊下の壁には、アンデルセンが訪れたイタリアの絵が掲げられ、スタッフの写真も貼られていました。

食堂は24時間オープンしていてそこで患者とスタッフが一緒に食事をします。勿論部屋でも食べることができます。

デンマークでは人口560万人にたいしてホスピスは18か所あり(220ベッド)、どのホスピスに入るか選べます。ここシェーランドは2006年に開設されました。独立法人で運営され12部屋あり現在4部屋増築中でした。



★多彩なスタッフ

医師 2名・・・1人ずつ交代で常駐(8時～16時)します。

(勤務のない医師は在宅で患者や家族からの電話を受けたりしています。)

看護師 25名・・・3交代で勤務します。
日勤(6人)準夜勤(4人)深夜勤(2人)

事務員・・・2名

理学療法士・・・1名

牧師 1名(半日契約)・・・週1回はミサを行い、説教をします。

医師、看護師、事務、理学療法士、牧師のほかに50人のボランティアもいて、ハーブの演奏、散歩の同行、話を聴く、手を握るなどで、できることを行っています。その中には奥さんをここで亡くされた人もいらっしゃるそうです。スタッフは私服ですが、牧師は説教のときは牧師服を着用します。

館内では、家族もスタッフも利用者とともにお茶を飲み談笑される姿がありました。

また、ボランティアも含めてスタッフは死と向き合うことになるため、スパークイズを受けるシステムにもなっているとのこと、これ

は必要なケアだと思いました。いいケアをするために、ケアする人も大切にされていました。

入院方法は判定基準があり家庭医や病院の医師からホスピスに連絡し、看護師3人と医師が入院希望の患者の身体的・精神的・社会的なアセスメントをして、入院の優先順位を検討します。

★ホスピス・シェーランド稼働状況

562名の入院希望がありその内の38%の217名が入院しました。217名の内訳は女性61%、男性39% 50歳以下5% 50～69歳73% 69歳以上22%

入院日数 平均21日(数時間～3か月)

入院しても体調が回復し退院する患者もあるそうです。しかしまた具合が悪くなるとホスピスに直接連絡して、再度入院できます。入院患者に多いのは女性では乳がんや肺がんがあります。2013年の傾向としては幼い子どもを持つ若い人が増えているそうです。



★死に対する不安への対処

ホスピス入所 OK と言われると利用者は改めて死が近いことを実感することになります。入所してからは、昨日まで話していた同じ入所者の死を、ダイニングルームにキャンドルが灯ることで伝えられます。見せていただいたタブのある浴室でも、自分の好きな曲を BGM にゆったりとお湯につかり温まることで、痛みが抑えられ、喜ばれているということです。入浴習慣のないデン

マークですが、日本の温泉のような感じで、自然治癒力を高める効果をねらうということでした。

利用者の家族も大きな不安と疲れを抱えることを思い、家族やスタッフのためのマッサージルームもありました。

デンマーク語にはヒュッケリという言葉があり、くつろぐ、なごむという意味ですが、ホスピスはまさにそれで、落ち着いた雰囲気、全体的には明るい採光の癒しの空間で、利用者や家族の不安や悲しみを和らげようとしているようでした。

★質疑応答

Q：病院とホスピスの違いはなんですか。

A：ホスピスではスタッフにもスペースにもゆとりがあり家族のケアができます。

Q：患者が食べたいものがあれば提供できますか。

A：勿論できるし、24時間オープンサンドなど提供できるようになっています。

Q：ボランティアの動機とボランティアになる資格について。

A：動機は多くは退職して何かの役に立ちたいと志望します。また家族を亡くした経験からとか、ある若い男性は自分がとても幸せなので誰かの役に立ちたいなど様々です。そしてスタッフを雇用するときと同じ説明をします。また講習会にも行ってもらったりします。報酬はないが、無料で食事ができます。

Q：亡くなった家族の会をするのはデンマークの習慣ですか。

A：デンマーク全体ではやはり死について話したくない傾向がありますが、ホスピスでは家族と関わったスタッフが集まり、思い出を語り合います。

★ホスピスで働くということ

私たちからマリアナに「なぜホスピスに勤務するのか」と尋ねました。彼女はホスピスに勤務する前は産科に11年間勤務をしていたそうです。誕生と死の両方を経験しているのです。そして、ハートと脳みそを使う仕事がしたいと、今の勤務場所を選んだということでした。今のホスピス勤務は責任も重いけれど、給料は国から支払われているが独立法人なので、マリアナは理事会のすぐ下の立場になり、物事の決定も早いと話してくれました。行政組織の決定には何段階もあり、民間よりも遅いということは、どこの国でも同じなのですね。

★見学から想うこと

日本にもホスピスはありますが、デンマークのホスピスが私たちの初見学でした。施設内は明るく、居室などはゆったりとしており、24時間食事が提供できたりすることは日本では聞いたことがありません。アリアナさんが「夜中でもお腹はすくでしょう」と言われた言葉が心に残っています。またスタッフの配置にも12人の患者に対して、日勤で看護師が6人、準夜勤で4人、深夜勤で2人と手厚さを感じました。

ボランティアも50人所属していて忙しい看護師を助けて患者に寄り添い、自分の出来ることで奉仕をしていることをうかがい、「なんと心豊かな人がいる国なのだろう」と思いました。ホスピスの精神は日本も決してひけはとらないと思いますが、国民誰でもが必要なサービスを必要な時に必要なだけ無償で与えられるのは、この国ならではの在り方ですね。

デンマークも日本と同じで死についてあまり話さないそうですが、この世に生れてきたことはより良い死に向かって生きていくことだと聞いたことがあります。最後のときをどこでどのように迎えるかは、自己決定し、選択できることが理想です。日

本ではホスピスに入る前に、多くの医療行為が試され、治療に疲れ果てた状態であること



が多いという印象を持っています。日本では、本人の望まない過剰な医療が行われているような気がしています。

この見学により心穏やかに生き抜くことを考える機会をいただきました。死を迎える一つの場所の在り方を学べたことは私たちの財産になりました。

ありがとうございました。